中学校「技術・家庭科」の乳幼児ふれあい体験学習における効果と課題

Infant Contact Experience of Junior High School "Technology and Home Economics" in Learning Effects and Problems

石　川　敦　子*　　吉　川　はる奈**
Atsuko ISHIKAWA　　Haruna YOSHIKAWA

2012年全面実施の新学習指導要領において、技術・家庭科家庭分野では指導項目「家族・家庭と子どもの成長」の中で「幼児との触れ合い、かかわり方の工夫」が必修指導項目となり、指導計画内に工夫し盛り込まれることが必須となった。日本の家族・家庭を取り巻く現状からも、中学生が乳幼児と実際にふれあう体験によって学ぶことへの期待は大きい。しかし保育体験学習の方法、効果の検討は十分ではないのが実情である。本論では、親子来校型とミニ講演型をあわせたジョイントタイプと園児来校タイプの触れ合い体験授業を実施した。その結果、生徒や参加者が多様な経験をすることや、ミニ講演会から中学生が父親像、母親像をイメージすること、「乳幼児と楽しむ大人の姿」に中学生が関心をむけること等の効果がうかがわれた。

キーワード　乳幼児、中学生、保育、体験的学習、

１　問題と目的

１－１　新学習指導要領全面実施によるふれあい体験学習の実状

新学習指導要領の全面実施が2012年から開始される。2011年度はその最終準備年として夏季休業中に全教科で教育課程説明会や研究協議会等で各中学校教員に学習評価の機能や、評価資料の活用についての基本的な考え方、教科における評価や評価事例についての講習が行われた。また、指導計画、評価計画の作成・検討についての配慮事項等も説明された。

技術・家庭科においても家庭分野で指導項目として改名された「Ａ　家族・家庭と子どもの成長」の中で、＜ウ、幼児との触れ合い、かかわり方の工夫＞が必修指導項目となり、指導計画内に工夫し確実に盛り込まれることが必須とされた。この取り組みに関連して、たとえばS市では、「生命尊重に係わる教育のカリキュラム開発」の一授業として「赤ちゃん・幼児触れ合い体験」をすることとなった。

このような形での新指導要領や自治体の積極的な取り組みが進んだ背景には、昔に比べ、日本の家族・家庭を取り巻く現状が、近隣や地域とのかかわりが減少・希薄化し地域の中での付き合いやコミュニケーションが取れず、孤立化、閉鎖化の増加また、少子化における年齢差のある兄弟姉妹の不在、家庭内における問題が周りに気付かれないまま進行していることが背景にあると思われる。

また様々な情報の氾濫により、未成年者の性交渉の低年齢化が加速し、望まれないこどもたち（unwanted Children）が妊娠・堕胎・出産、乳児遺棄、殺人という悲しい事件にまきこまれることも社会問題化している。愛情なき乳幼児を邪険に扱い、保護者の養育意識の低下から子どもの心身の発達に与える影響は大きく、子どもに対する虐待、育児放棄という深刻な状況も増加してきていることもあげられる。

子どもの健全な成長に欠かせない家族の持つ本来の養育や心身の発達の支えとなる基本的な家庭の機能は、核家族化、様々な便利な製品や道具、店舗等の出現と利用の増加などにより崩壊し消失しつつある。離婚や失業による家庭ごとの経済的格差も増加している。

そのような現代の家族の状況を鑑み、家庭科教育が担い役割とする、本来持つべき家族のあり方をどのような授業展開をとおして家族のコミュニケーション能力を高め、お互いの存在を認め合い大切に思い、気遣い支え合えるような態度を養いあえるのかは大きな課題である。特にまだ子どもの感性を残す中学生に幼児とのふれ合いをとおして、幼児の心身の特徴、笑顔や動作の愛らしさ、言葉のやりとりを、直に体験してもらい、その小さな命

＊　さいたま市立土合中学校
＊＊　埼玉大学家政教育講座

の大切さを感じることは重要なことである。

１－２　家庭分野がかかえる時数不足の問題

全国で指導要領の改訂により技術・家庭科の指導時数は少なくなり、三年生においては、技術・家庭科を合わせて年間35時間、つまり週に１時間という時数削減がなされた。一学期の間に進められる授業数は家庭分野で２週間に１時間となり、学期毎にわずか４～５時間となった。

年間指導時間17.5時間で、実質は14時間程度の授業の中での、保育実習体験は事実上かなり実施困難な状況にある。

１－３　体験型授業実施に対する校内教職員による理解

体験型授業の実施にあたるには、学校長をはじめ技術科教員、他の教職員の理解と協力が不可欠である。年度当初の職員会議において、家庭科における親子来校型触れ合い体験学習についてのおよその時期と学習内容についての説明をさせて頂き、協力と理解を求めることになる。

生徒への声掛けをはじめ、授業時間割の移動や交換、授業時のクラス生徒への誘導、支援や準備道具の運搬、掲示物の貼り付け、放送撮影機材の設置、触れ合う親子の受付や待機室等々。緊急時のための養護教諭への連絡も必要である。

授業実施の説明の際には、過密な年間スケジュールの中で実施する乳幼児を含む体験型授業への不安が示され、特に生徒が安全に参加できるのか、また安全に授業を実施できるのかに対して説明することが求められる。

１－４　ふれあい体験型授業のスタイルによる特徴のちがい

体験型授業を行う際には､表１のような形式があるが、それぞれの特徴､利点と欠点は以下のように整理できる。

表１　ふれあい体験型授業のスタイル

①　幼児施設等訪問型触れ合い体験授業
②　乳幼児と親による来校型ふれあい体験授業
③　長期休暇時の個人によるふれあい体験授業
④　子どもを連れた親によるミニ講演型授業
⑤　園児が来校して一緒に遊ぶふれあい体験授業

① **幼児施設等訪問型触れ合い体験授業**では、利点として幼児の居慣れた空間の中で自然の言動や他の幼児とのやりとりを観察出来、中学校側の環境整備が不要な点があげられる。しかし欠点として、施設までの移動時間が体験時間を左右し、移動中の生徒の安全指導や生徒指導に気を遣うこと、園児と接触するより周囲にて観察することに偏る傾向がある。

② **乳幼児と親による来校型ふれあい体験授業**では、利点として移動時間が不要なこと、受け入れ準備や事前の確認、グループごとに配置し迎えることができる。しかし、欠点として家庭科教員にとって来校親子の確保が負担となる。学習場の確保と衛生・安全環境整備、幼児の気持ちや年齢に合わせたおもちゃ等の製作、掲示物、家庭科教員のみでは準備時間の不足･負担リスクが大きく周囲の協力が必要となる。

③ **長期休暇時の個人によるふれあい体験授業**では、利点として生徒の個々の時間に応じて、幼児施設等に行ける、グループごとに迎えてもらうことができる点。欠点として、家庭科教員が立ち会えず、生徒の様子を直接、観察出来ない。訪問施設の状況や環境を把握しきれない。どのような触れ合いができたのか報告書等で知るしかない。必修科目となるので、個人任せの体験は無責任で危険が伴う。取り組み全体へのリスクが高い。参加生徒の姿勢はそれぞれの意識差が態度に表われ施設側に迷惑をかける可能性もある。

④ **クラスでのミニ講演型授業**では、利点として、生徒は集中し熱心に一人の親の話を聴く点。一方欠点として話し手である親と十分に打ち合せ、授業の趣旨に賛同して頂き話す内容を選ぶ必要がある。生徒は受け身になり質問が出にくい。幼児とのふれあいは困難な点にある。

⑤ **園児が来校して一緒に遊ぶ触れ合い体験授業**では、利点として実施依頼先が１つですむこと、生徒の移動の時間を確保しないですむため、ふれあう時間を十分確保できるという利点がある。しかし園児が移動する際の安全確保が必要であり、移動手段や移動に要する人員の確保等の配慮が必要になる。

以上のような特徴を理解したうえで、校内の状況をふまえ、いずれかのスタイルで実施してきた。利点と欠点を認識したうえでの実施が必要になる体験授業であり、質の向上にむけて試行錯誤の姿勢が求められているが、多様な実践事例の蓄積はなされていないのが実情である。特に、②乳幼児と親子来校型、④子どもを連れた親によるミニ講演型、⑤園児来校型は、実践による蓄積は十分ではない。本論では、**実践１**として②と④をあわせた**ジョイントタイプ**、**実践２**として⑤園児来校型の、触れ合い体験授業を行い、乳幼児触れ合い体験授業によるその成果と課題を考察したい。なお本論での文字表記について、学習指導要領に基づく本来の字体は、「触れ合い」であるが、こころとからだのふれあい効果と授業の参加協力者が親しみやすい理由で、本論では「ふれあい」とひらがなを使用している。

２　方法

２－１　学習のねらいと課題及び学習内容

実践１

ミニ講演会と親子来校型ふれあいジョイント授業

・日時：６月　３年生１，２時限目　実施
　クラス数が多いのでＡとＢのブロックにわけて実施した。
・場所　中学校武道場

＜学習課題＞　「幼児を知ろう・ふれ合おう」

＜学習のねらい＞

１，乳幼児の生活やその家族について質問を通して聞き取り、自分の調査したい課題を発見するための資料の1つとする。
２，幼児や家族の様子を観察する。
　（幼児前期の心身の発達について考える）
３，幼児とふれあう。

＜学習の内容＞

乳幼児（０才～２才）とその育児に主にあたっている保護者（主に母親）を中学校に招待し、

１，幼児と過ごす一日の様子や生活にまつわる様々なことをインタビュー形式で、生徒が保護者に質問し、答えていただく。
２，幼児と遊び観察をしながら、幼児とふれあい、接触することを通して幼児の特徴や心身の発達について気付いたことをまとめる。
＊おもちゃや絵本・お絵かき等を用いて遊ぶことも含む

＜実施方法＞

１時限目：ミニ講演会

親子とのふれ合い授業の前に、子育て中の父親、母親１名ずつ20分ずつ新しい家族をもつことを決めた理由、家族や育児そして自分の家族に対する気持ちや思いについて話しを聴くミニ講演会を設定した。

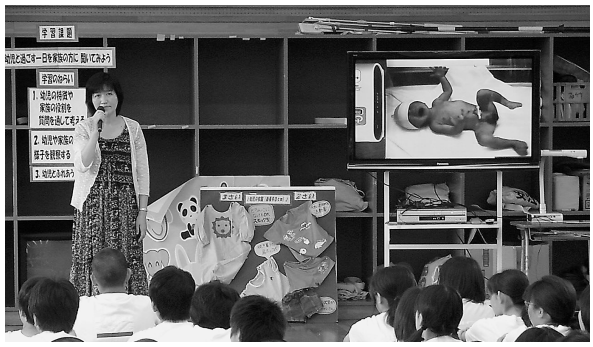
・講演者１：妻と二児を育てる父親Ｓさん（22歳）
・講演者２：４ヶ月の子どもを育児中の母親Ｔさん（34歳）

２時限目：親子ふれあい授業

講演者の話のあと、２時間目子どもを交えて育児中のお母さん達に話を聞き、乳幼児との触れ合いを持つ。
総勢58名の０～２歳児の子どもと親が来校。
場所：武道場

・Ａブロック　３クラス合同　25組の親子参加
　日時　６月　　１－２時限目
・Ｂブロック　４クラス合同　33組の親子参加
　日時　６月　　１－２時限目

講演者Ｓさんの話をきく生徒



講演者Ｔさんの話をきく生徒

＜実践１授業指導案＞

★授業者・来校親子・生徒それぞれの動き			
時間	授業者	講演者・親子	生徒
8:35 8:45 8:50	誘動・欠席持ち物確認、諸注意	講演者来校２名 校長室にて打ち合せ	体育着着用 武道場移動 準備確認
8:55 1 時 間 目	挨拶 講演者紹介 生徒の様子の把握・評価	挨拶 講演①22歳男性 講演②34歳女性（各20分ずつ）家族映像あり	号令・挨拶 メモを取りながら視聴する 講演後日、感想を記入提出
9:45 休憩	来校者確認 調整確認	授業20分前～受付・名前の確認、資料と交流班・流れの確認	触れ合う親子の出欠確認、調整あり
9:55 2 時 間 目 10:40	挨拶 親子紹介・班との合流 班ごとの様子の把握・評価 触れ合い終了の合図 班長集合・プレゼント配布・贈呈 挨拶	挨拶 触れ合う班の班長に誘導されグループに入る。 会話・交流・生徒との触れ合い（触れ合い時間40分） 触れ合った班からプレゼントを渡される 挨拶	号令・挨拶 班長が親子を班に誘導。 質問・会話・交流・幼児との触れ合い 触れ合った班長がプレゼントを渡す。 号令・お礼の挨拶
休憩 3 時 間 目	親子の感想要望等聞き取り、様子の観察、記入票の回収	触れ合い授業の感想記入、 生徒の態度評価	教室に移動 次の授業へ 明日感想を記入提出

親子のかかわりをみている生徒

乳幼児と遊ぶ生徒

乳児を抱っこさせてもらう生徒

実践２　幼稚園児来校型ふれあい体験授業

・日時：10月中旬　３年生　２・３時間目
・市内私立幼稚園の園児と保育者が来校
　（４・５歳児クラス200名程度）
・場所：中学校体育館

＜学習課題＞　　「幼児と遊ぼう、ふれあおう」

＜学習のねらい＞

１，幼児とのふれあいを通して、自分の課題を解決する資料の１つとする。

２，幼児の様子を観察する。（年齢・成長による幼児の心身の発達について比較する）

３，幼児と一緒に体を動かしふれあい、幼児後期の心身の発達と特徴をとらえ、理解を深める。

＜学習の内容＞

幼稚園に通園する幼児（４歳児、５歳児）を中学校に招き、

１、体育館等で生徒と一緒に体を動かし全身運動・遊戯や絵本の読み聞かせをする。

２、ふれあいを通し、幼児の言語や心身の発達や特徴を理解する。

夏休み中に、幼稚園側と具体的な打ち合せを行った。園児の移動が必要になるが、触れ合う時間が確保できるか、中学校の体育館は園児が遊ぶ場として可能か等詳細な話あいをした。

＜実践２授業指導案＞

★授業者・来校者・生徒それぞれの動き			
時間	授業者	幼稚園児・先生	生徒
9:55 10:15	誘動 持ち物確認 諸注意	園児・先生来校授業者＋先生最終打ち合せ ﾍﾟｱﾘﾝｸﾞ	体育着着用 準備確認 体育館入場
10:20 ① 時 間 目	10:20挨拶 授業を開始 「一緒に遊ぼう・ふれあおう」	挨拶 ペアになった生徒と一緒に遊ぶ	号令・挨拶 ペアになった園児と一緒に遊ぶ
② 時 間 目 11:10 11:20	・手遊び ・だるま落とし遊び ・全身運動 ・歌の交換 生徒・園児の様子観察 評価 ふれあい終了の合図 生徒代表の挨拶・園児のあいさつ 園児退場 諸注意 生徒退場	会話・交流・生徒とのふれあい 園児の合唱 （ふれあい時間50分） お礼のあいさつ ふれあった生徒からﾌﾟﾚｾﾞﾝﾄｶｰﾄﾞを渡され退場 帰園	会話・交流・幼児とのふれあい 生徒の合唱 質問・ お礼の挨拶 ふれあった園児にﾌﾟﾚｾﾞﾝﾄｶｰﾄﾞを渡す 教室に戻る
11:25 11:45	クラスごとの様子の観察、記入票の回収 授業終了		教室にて感想を記入提出 授業終了

絵本の読み聞かせを行う生徒

園児と「くっついたゲーム」を楽しむ生徒

２－２　学習のまとめと評価の仕方

体験授業によりそれぞれの＜学習のねらい＞を把握し、自分なりの乳幼児理解や家族というものを理解するために

生徒一人一人が自ら「子どもに関する」課題を見つけ、「自己の課題」を設定し、触れ合い体験から得た知識や疑問をその後の課題解決に向けて調べ学習や、聞き取り調査・収集資料の検証をしながら、レポート（新聞形式・言語化・文字化による評価）を作成し提出する。

３学期にはクラスごとに個別発表（表現・伝達能力）し、それぞれが学習したことをクラスで共有化を図る。

３　結果と考察

３－１　ふれあい体験から生徒が学ぶもの

「子どもとふれあうのはかわいい」

・僕は子どもとあまり触れ合ったことがなかったのでとても不安でした。でも、子供達に会ってみて、不安より可愛いなあという気持ちの方が強かったです。子どもは凄く規則正しい生活をしていました。僕もそうだったのかなと思いました。後半は遊びなれてきましたが、すぐに飽きてしまったりして子どもの興味をひくのは何だろうか考えながら触れ合えたのでとても良かったと思います。今回の授業で自分が親になったとき、子育てで味わうようなことを凄く一部だけど体験することができて良かったと思いました。将来に生かしていこうと思いました。

・自分も子どもの頃はこうなってこうしていたんだと思いました。赤ちゃんはすごいパワーを持っていることがわかった。・今回の授業でわかったことは、‘幼児は本当に可愛い’ということです。今まで幼児と触れ合うことはできなかったけれど将来父になるまでには慣れておいて、ちゃんと愛情を注ぎたいです。

「かわいいけれど子育ては大変」

・赤ちゃんは本当に小さかった。それにお母さんのことが好きなのが凄くわかった。質問してみて、いつも赤ちゃんの生活のリズムや機嫌が良いわけではないことも聞き子育ても大変だとわかった。一日12時間くらい寝るのに驚いた。

「乳幼児の特徴に気づく」

・班に来てくれた親子は優しそうなお母さんと人見知りそうな子。私は子どもをあやすのが上手い方だと思ったが目も合わせない、おやつも食べない・・
質問からお子さんの特徴や好きなものを聞き、触れ合っている内に風船に興味を示し、みんなでキャッチボールをしました。時折笑顔も見せ始め、なれてきてくれました。驚いたのは運動能力の発達の早さです。始めは打ち付けるだけの投げ方が数十分で上手に投げることができるようになりました。みんなニコニコで、最後はハイタッチでお別れ出来ました。小さい子はやっぱり可愛いです。大好きです。楽しかったです

・触れ合いの最初は反応してくれなかったがだんだん慣れて笑ってくれたときは本当にみんなが嬉しかった。

「育てる行為に気づく」

・名前の由来の話で「たくさんの愛が子どもの元に来るように」という意味をこめたときいた。そのように親が思っている時点で、もうたくさんの愛情が子どもに届いているのだなと思いました。

・一番好きなことは両親と遊ぶことでした。逆に嫌がることはやりたいことを制止されること。自分でもそうだから小さな子ならなおさらだと思うので、我慢させたその後抱きとめてあげたりしてほめたらどうかと思いました。小さな子の気持ちや行動を見つめているとしあわせな気分になりもっと一緒にいたかった。

・子育てはいい加減にしてはいけないとわかりました。痛みを背負ってまで産む大事な命なのだから簡単に投げ出したりしたくないです。私にはまだちゃんとした夢とかはないけれど自分が幸せな道に出て行きたいです。子どもは夫婦の証だと思いました。

・今日の授業で幼児との接し方を学ぶことができた。僕の班の子はなかなか一緒に遊べなかったので残念だった。でも今日学んだことはこれから生きていく上でとても重要なことだと思う。講演会もとてもためになる話しだった。

・今日赤ちゃんと接してみてこれから自分が大人になって子どもができたときにすごく役立つ事だと思った。幼児と接したことがあるが､赤ちゃんは初めてだった。人見知りなのかあまり接することができなかったが、それは当然だと思った。お子さんの名前の由来を聞いて、願いや思いが詰まっていて良いなと思いました。僕の名にもちゃんと由来があり、大切さを感じることができました。
触れ合った親子さんに感謝したいです。又このような授業があればたくさんやりたいと思います。

・幼児がいるだけでその場がなごみ、みんなの表情が緩む。すごいパワーを持っているということがわかりま

した。いつか子どもを産んだ時ちゃんと育てられるように今日の体験を忘れず生かしていきたい。子どもを産むのにはそれなりの苦労や覚悟が必要だと思うけど自分をここまで育ててくれた母を見習い良い母になりたい。

乳児をひざにのせてあやす生徒

３－２　多様な経験をする参加した母親

参加した母親も多様な経験をしている。終了後のアンケートには、多様な意見や感想が記述された。

「生徒の態度・対応についての感想」

・みんなとても熱心に質問をしていた。子どもを抱っこしてすごく感動してくれた。
・‘抱っこひも‘でだっこをさせてあげたら「不思議な感じ」とうれしそうに話していた。（右上写真より）
・子どもが最初人見知りをしてしまい困ったが、生徒のみなさんが優しく話しかけてくれ、すぐに安心出来たようです。私の話もきちんと聴いてくれ、こちらも良い経験ができました。沢山遊んでくれありがとうございました。
・きちんと要点をまとめてしっかり話しをしてくれました。子どもも初めは目も合わせない状態でしたが、みんなが明るくあやしてくれて最後はとても楽しそうに遊んでいました。
・目を見ながら、質問用紙に書いていないことも臨機応変にさらに質問してくれ、真剣さと一生懸命さが伝わってきました。
・中学生になると自分の弟や妹も大きくなっているでしょうし小さいこどもたちと接する機会はないと思います。そのような中で０～２歳のこどもたちと接することのできる授業は生徒たちにとっていろいろな発見や新鮮さを感じることができると思います。恥ずかしくて質問のみで見ているだけであったとしても意義があると思います。また、母親達にとっても中学生と話したり子どもと遊んでくれる様子を見るのは楽しく新鮮でした。わが子の特徴も知ることができました。
是非今後とも続けて欲しいと思いました。今日はありがとうございました。
・こういった地域内の交流はこどもたちの成長にとっても大切なことだと思いますし、子どもに興味を持って成長すること将来に役立つとても良いことだと思います。
みなさんこれからも勉強がんばって下さい。

「授業内容についての感想」

・質問時間を区切り、触れ合い時間を長くすると良い
・途中でお菓子が出てきて子どものテンションが上がった。とても良いアイデアだと思いました。
・質問時から生徒さんに子どもを抱いてもらい、その様子がとてもほのぼのしていました。ひざに座らせて仲良く遊びながら話ができたので見ている私も楽しくなりました。
・沢山質問されました！その後子どもを次々に抱っこしてもらい、距離が縮まった気がしました。先生方も見守って下さり安心して授業に参加出来ました。
・とても楽しい授業でした。
その上、いっぱいのお土産を頂き恐縮しています。
・こんなに大きなお兄さん、お姉さんと触れ合うことが普段無いので凄く良い経験になったと思います。

「その他授業への改善点」

・クラス、班が多すぎて、接触開始が遅くなってしまう
・質問が多く、触れ合う時間が短くなった
・もう少し長くふれあう時間があると良かった。

このように、子どもとふれあう際の真剣さや戸惑いなど普段出会わない中学生の姿を目にしたこと、自身の子どもの反応、さらには授業の内容を理解したうえで、意義や改善点等も積極的に記述していた。

３－３　ミニ講演会から父親像、母親像をイメージする生徒

父親、母親それぞれの講演をきき、生徒には身近な父親像、母親像をイメージする機会になった。以下は生徒の記述である。

父親Ｓさんへの感想

・Ｓさんはとても苦労してきて子どもながらに家族を支え自分の夢を実現していき、とても凄いと思った。
（男子）
・Ｓさんのようなしっかりした夢と家族を大切にできる男になりたい。自分も早く自立したいと思っていたので真剣に進路を考えていきたい。**（男子）**
・お母さんを支え長男として家族のことを考え、自分の将来を思い描きそのとおりに実現していっていることが素晴らしい。尊敬しました。**（女子）**
・Ｓさんのように家族を守り支えてくれるような人が結婚相手になってほしい。家族を思う力は人によって違う。自分は甘えているなと感じた。今できることから家族を支えていきたい。**（女子）**

母親Ｔさんへの生徒の感想

・赤ちゃんのことについていろいろ知ることができました。

もし奥さんが出産することになったら僕はそばにいて声をかけてあげたい。赤ちゃんのことを考えて生活したいです。（男子）

・Ｔさんが子どもの誕生までのエピソードを真剣に語ってくれたことが一番印象に残りました。命の誕生、命の大切さがわかってきました。母に感謝したいです。（男子）

・Ｔさんの言われたとおり「産んでくれてありがとう」と感謝しなければならないと思いました。もし、私が産む立場になったら産まれてくれてありがとうと感謝したいです。（女子）

・Ｔさんのお話はこれから体験するかもしれない未知のことでとても為になり、私も頑張ろうと思いました。大体の想像をすることができたし楽しみのようなチョット怖いような今からドキドキしている感じです。（女子）

授業の趣旨を理解して頂き、父親、母親双方に講演をして頂いたが、生徒には、身近な父親像、母親像としてインパクトを与え、その後の触れ合い授業にもつなげることができた。

３－４　講演者自身が学ぶもの

父親Ｓさんは２日間、講演してくださり、終了後、「二日間講演させて頂いて、自分もまた家族のことを深く見つめ直すことができた。さりげない毎日も妻子の元気な声や電話、お弁当などなど、僕が家族を支えているものだと思っていたが、改めて全く違うように思えてきてしまった」と語った。自身の家族への思いを伝えることで表現される生徒の感想にふれ、自分自身の家族を再度捉えなおす機会となったようである。

また母親Ｔさんは、「自分も家庭科の教師であったが、この触れ合い授業は取り組んだことがなく、何かお手伝い出来たらと思っていたので参加したが、生徒がとても真剣で話し声なく自分の話に聞き入ってくれ感動した」と語り、やはり、生徒が聞き入る姿、見入る姿に感動したとのことであった。

３－５　「子どもと楽しむ大人の姿」への関心

多くの教員に協力をいただいたが、中には園児や中学生と一緒にお遊戯を踊り、しぐさを真似て歌ってくれた教員がいた。それを見た生徒は、驚いたような表情からうれしそうな表情にかわり、その場に参加した大人からも笑顔がみられた。

「子どもと一緒に楽しむ」という姿が参加した大人にも自然にあらわれたエピソードだが、生徒にも強く印象に残る出来事にもなった。そのような気分の高揚がこの授業の持つ二次的効果ではなかろうか。子どもと楽しむ周囲の大人の姿にも、生徒は心を動かされるということだろう。

とはいえ、周囲の教職員をはじめとする大人の受け止めはさまざまである。実施前には「おもしろそうね、楽しそうね」いう意見だけでなく安全管理上の不安を指摘する意見もだされる。丁寧に説明しながら周囲の理解をすすめていきたい。

さらに母親にとっての親子触れ合い授業は、育児そのもの子どもを賞賛してもらう機会となる。生徒は自分たちが「可愛い、すごい」と言うことが、その子のお母さんを喜ばせてもいることを知り、母親の日々の大変さと子育てのやりがいには周囲の人々のねぎらいや声掛けが必要なことを理解していく。家庭科教員としては事前指導をいかに細部にまで心砕いて行い、周囲の協力を得られるかでその体験の成果は驚くほど違いが出る。今後も多くの方々の協力を得ながら、より質の高い実践をめざしていきたい。

輪を小さくし乳児をのぞき込む生徒

４　今後の課題

４－１　実施できる時期と時間

中学校の年間指導計画は４月初回の職員会議で提案される。主な行事やテスト、成績交換、学校総合体育大会、体育祭等々３月までのスケジュールは目白押しである。その後時間割担当の先生が授業を組み入れて試行版として出され、調整を行ない時間割が決定する。知名度の低い触れ合い授業が必修の授業となってもその日時を決定出来るのはその後のことにしかならない。さらに何とか働きかけて時期を確保したとしても、時間の確保が問題になる。現在の中学３年生の技術・家庭科の授業は週に一回の授業を交互に行っている状況で、触れ合うにはせめて２時間続きでほしいが、かなりの調整困難を伴う。

３年生は成長過程で進路を考え、家族の経済力や通学時間、学力との差にだんだんと進路決定に真剣に向き合っていく。自分だけでは決められない悩みにぶち当たる。だからこそこの時期に過去の自分、今の自分、

まだ見えない将来の自分を考えるきっかけにもなりうる。

４－２　事前の連携、事後の連携

どの授業スタイルでの場合でも、授業を定着させ毎年引き続いて行うには、細やかな気配りや誠実な周囲との連携が欠かせない。そして何より担当教員の事前指導・事後指導が重要になる。

また連携した諸団体へのお礼状や交流時の記録写真等も残し、報告と共にお渡しする等の事後の配慮も大切なことであろう。授業者が夏休みにお礼状を発送し、お礼状を受け取った母親の方からお子さんの手形や足形の入った手紙や暑中お見舞い、生徒への受験頑張れメッセージ等を頂き、廊下に掲示したこともある。生徒たちのつたないお礼状でも心は通じる。掲示板に貼られた葉書やメッセージに「～ちゃんからだ！」と喜ぶ生徒も多く見られた。

本取り組みは「取り組みさえすれば」「授業が終われば」それで終えられるものではない。人とつながり、信頼され共に作り上げて初めて得られるものがある。授業のみならず充分に配慮を重ね、周囲の協力のもとで行うこと、そしてその年の成果が次年度の取り組みにつながると考える。

４－３　事後アンケートからみる課題

図３は､ふれあい体験授業後の生徒の①授業への関心度、②親御さんとふれあいがどの程度できたのか、③乳幼児とふれあいがどの程度できたのかを５段階の自己評価で記入させた中から､３クラス分111人を無作為に抜粋し集計した。

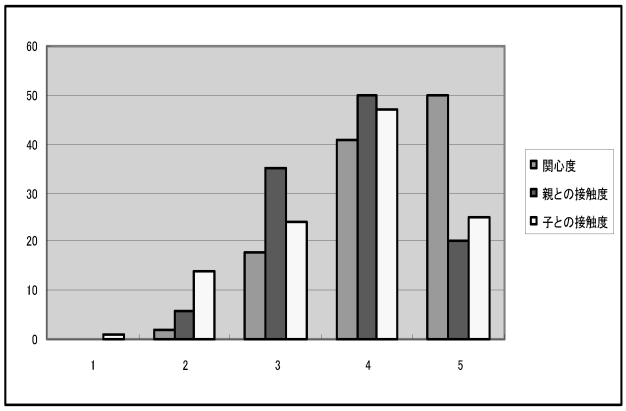


図３　授業後の生徒の感想

１非常に低い、２やや低い、３ふつう、４やや高い、５高い　にわけて回答した。

その結果、４、５あわせた＜高い＞と答えた生徒は関心度は83%、親御さんとのふれあい度は65%子どもとのふれあい度は65%というものだった。

生徒の関心度、乳幼児とふれあえる期待感は高く、しかしながらふれあい度が65%に留まった理由としてグループの中での生徒の人数が多く、自分が接触する機会が余りなかったというものが多かった。

次年度の取り組み方への参考データとなった。

ふれあい体験学習が必修になったことは喜ばしいことである。しかし未だにほとんどふれあい体験学習実施の経験がない家庭科教員がこの授業を行うとき、何をどのように参考とし、どのような形式で、時期や時間帯を確保し、生徒を動かしていくのか、そこまでの具体的な実践例は蓄積されていない。授業実施の負担や準備への不安が大きく影響していると思われる。しかし上記に述べてきたように、授業に参加し、ふれあったお互いが、それぞれ自分や家族との生活を見つめ直し、改めてその大切さを実感することができる機会であるならば、その後の授業のみならず、生徒の学校生活全体にも大きく影響を与える可能性をもつ授業ともいえる。今後も引き続き、実践を重ねながらよりよい効果をえるかたちを模索していきたい。

最後に本授業の実施にあたり、惜しみなく御理解御協力を下さった校長先生をはじめ子育て支援センターのスタッフ、親子さん、幼稚園の園長先生はじめ園児の皆様に心から御礼申し上げます。

引用・参考文献

・尾城千鶴・吉川はる奈：高等学校「家庭科」における保育体験学習の教育的効果と課題　埼玉大学紀要(教育学部)　59(2)　59-68　(2010)
・伊藤葉子：中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討　日本家政学会誌　58-6　315-326（2007）
・砂上史子、日景弥生、中嶋明子、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習の意識変容（第2報）　日本家庭科教育学会誌　48-1　10-21（2005）
・室　雅子　中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割　家庭教育研究所紀要　21　75-85（1999）
・吉川はる奈、金子京子：中学生と大学生を対象にした保育学習における実践的研究
埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要　6　171-179（2007）